戦旗

才十三号
一九六〇年五月一日発行
発行所
東京都文京区元町一の七
世界労仂運動研究所
編集 発行人 鏑木潔
一部 十円

万国の労仂者団結せよ！
革命的前衛・共産主義者同盟を
すべての工場に組織せよ！
共産主義者同盟

「戦旗」固定購読
お申し込は
東京都文京区元町一丁目七
世界労仂運動研究所内
戦旗経営局
定価 一部 十円
月 三〇円 半年一八〇円

メーデー・アピール〝万国の労働者決起せよ！〟

革命の旗を高く掲げて進め！

安保批准阻止・岸打倒の最後の時だ

一九六〇年五月一日
共産主義者同盟

全日本の労仂者諸君！第卅一回メーデーがやつて来た。全世界の仂く仲間がガツチリと腕を組み、資本家階級の支配から自からを解放し、社会主義をうちたてる闘いの雄叫びをあげる日がめぐつてきた。

メーデー。この言葉はわれわれの心になんと明るいひびきを与えていることか。「仂くものの祭典」として。年に一度だけ労仂者が「俺は労仂者だ」と公然と表明し大手をふつて大道を歩ける日、妻や小供や恋人をつれて明るい平和的な空気の中で、しかも仂く者の誇りを高くかかげられる日、こうしたものとしてメーデーはわれわれの心にうつつている。

だがこころよいひびきで語られる五月一日の労仂者と、現実の五月一日のわれわれとのあまりにもきびしい違いは何としたことか。メーデーに名を借りて、忘れようとしても忘れることの出来ない四月二十六日の国会前のあの出来事。安保改定阻止のため、一萬人の学生と労仂者が怒濤のごとく闘つたのは、たつた数日前のことなのだ。そして今日も新安保条約の衆院通過を阻むか否かの、きびしいつばぜり合の一日なのだ。日本労仂運動の運命を決するといわれる三井三池の首切り反対の闘いは、今も九州の一角で三池の仲間が命をかけて続けている。労動戦線に深く喰い入る民社党の活動によつて、あちこちで「分裂メーデー」が行われている。

今日一日、自分が労仂者であることをはつきり感じた者は、自分の背に重くのしかかつている毎日の苦しい労動と安い賃金、職制の圧迫を、自分の足にくい入つている重い鎖に気付くだろう。そして日本の労仂者階級が今立たされているきわめて大きな運命のわかれ道をはつきりと知るであろう。

一八八六年の五月一日、シカゴの労働者が八時間労仂制を要求して立上り銃火に倒れて以来、世界中の働くものがこの日を自分達の日として定めたのは、まさに自分達労働者階級の姿を、はつきりと知り、その任務を見きわめるためであつた。だからこそわれわれの先ばいは同志のかばねを踏みこえてメーデーを闘つて来たのである。

三百六十五日の中のたつた二十四時間を、資本家からお暇をいただいて「お祭り」にするだけで、資本の奴隷に甘じることは労仂者にはできない。古いメーデーの歌が高らかに歌つたように「奪いさられし生産を正義の手もて取返す」ために、日本の労仂者の任務を今日こそはつきり知らねばならないのだ。

（二）

この数年間、労仂組合の指導方針は、メーデーの成功のために賃闘を始め全ての「闘争」を四月中に打切ることであつた。今春の闘争もその例外にもれなかつたがきびしい階級情勢はそれさえ許さない。日本資本主義の歴史的発展段階を象徴する新らしい安保条約の国会批准は、あと何日かのうちにかかつている。労仂者のストライキと強力なデモを国会につきつけ批准を阻止することは最大の急務である。

安保改定阻止の闘いは、日本における両階級の最も代表的な決戦として続けられている。

敗戦後十五年、何度かの危機をのり切り、労仂者の犠性のうえに急速な復活をとげてきた日本資本主義は、欧米列強と対等にせり合う帝国主義国としてあらゆる方面の体制を確立してきた。経済力の強化のために大胆な合理化が進められ、その犠性は首切、労仂強化として毎日労仂者に強いられている。「石炭合理化」に一番はつきり示されたように、これを進めるためにはまず労動運動の徹底的な破壊が試みられる。国鉄、日教組でつづき、今炭労に集中している攻撃は、政治権力からゴロツキに至るすべての力を動員して労仂者の抵抗を打破つて行く。さらに労動運動の内部から資本家と協力し、仲間を売ることを専門とする勢力、民社党、全労、第二組合を育成し、闘う労仂者に代つて彼等を労動運動の指導者にしようと暗躍が続いている。こうして労仂者の抵抗を打破り、合理化をすすめたくわえた莫大な利潤をさらにふやすため、帝国主義的な海外への進出をすでに開始しているのだ。

この日本資本主義の新しい歴史を世界に誇示し、帝国主義者にふさわしい戦争の準備をするものが新安保条約なのだ。

だがそれは、彼らの狙いが全てうまく行つた時の話であり、逆に労働者階級はこの新安保を粉砕することによつて有利な地歩をかため右翼へ全労へと雪崩をうつて落ちて行く労仂運動指導部を闘う部分ととりかえて一挙に階級的な総反撃に進むことが出来るのだ。岸内閣を打倒し、一大労働攻勢をつくり出すか、全労の天下をよび「経営者の十五年」の屈辱にたえねばならぬかの決戦である。

日本においてわれわれが当面するこの情勢は、全世界に流れる新しい歴史の不気味な胎動の鋭い表れである。

資本家は「黄金の六十年代」を欧歌し、公認の「共産主義者」は「平和共存の年、社会主義の圧倒的優位」を欧歌する。だがその言葉奥にこそ本当の歴史の動きがあることをわれわれは見抜き、備えねばならない。「黄金の六十年代」は、第二次大戦後の世界資本主義が長い曲折を経て新しい時代に入つていくことを物語る。西ドイツ、日本が、そしてドゴールによつて労仂者階級をたゝきふせたフランスが、アメリカの富の一人じめに挑戦し、はげしい帝国主義間の競争がはじまつているのだ。しかも資本の無慈悲な運動法則は、繁栄の大きさと同じだけの破局を内部に育てる。イタリヤの動揺は続き、長く安定をほこつた西ドイツの中にさえ資本主義経済の破たんが顔を出している。これに拍車をかけるごとく、アフリカ大陸には黒人解放の嵐が吹きあれ、アジアの防共線李承晩独裁制権は学生の蜂起によつて大揺れに揺れている。日本の安保改定をめぐる闘いは、こうした世界の資本主義の矛盾の心臓である先進資本主義国で爆発させるものとして、最大の比重をもつているのだ。しかし資本主義の新しい動きに応じて、新しい闘いを組織し、その矛盾を擴大して資本の秩序を破壊し、輝かしい世界革命の烽火をあげる者はだれもいないロシヤを解放し、怒濤ごとき革命の力を世界の労仂者階級に与えるべき公認の共産主義者たちは、解放の人民を新らたに支配する官僚の地位に甘んじ、帝国主義者との平和共存によつて資本主義打倒の闘いをことごとく挫折させている。さらに資本主義国内部の共産主義者たちは、自から革命の前衛として闘うことを恥とし、資本家の政治政策の若干の修正を願うことを使命とするまで堕落している。フランスで、イタリアで、インドネシヤで、日本で、労仂者階級が資本主義の危機に応えて立上つた時、必らず「平和共存」の旗印しは、労仂者階級の断固たる行動をおしつぶし資本家や中小ブルとの「統一と団結」の中に埋め殺してきた。

こうした恥ずべき歴史と絶縁し、日本においてわれわれ共産主義者同盟は世界革命の旗を高くかゝげて立ち上つた。われわれは東洋における唯一の帝国主義国日本の階級闘争を指導し、こゝに労仂者階級独裁の権力を打ちたてることによつて全世界における社会主義革命の火蓋切るために、さらに全力をつくすであろう。裏切りと偽りの指導から全世界の労仂者階級を解き放ち、労仂者階級解放の戦いに進めるため、新しいインターナショナルの結集がその第一歩をすでに踏み出したことを、われわれはこのメーデーに当つて明言する。全世界が日本の安保闘争注目しているのだ。

（三）

全国の労仂者諸君！共産主義者同盟がメーデーに当り諸君に訴えることは多くある。だが他のあらゆるものと全く異つた、われわれだけのよびかけは「権力獲得を目ざして前進せよ！」である。

メーデーの中で、日々の闘いの中で、労仂者の階級的連帯はつちかわれて行く。資本主義の下ではいかに改良の闘いを続けても、労仂者の幸福はかちとれぬこと、社会主義だけが人間の解放をもたらすものであることが闘いの中で学ばれて行く。われわれはさらに全世界に解放のおとずれるまで、眞の社会主義はあり得ないことを付け加えよう。

だが今日、社会主義を実現するために、労仂者階級が力をもつて資本家から権力を奪いとらねばならぬことを公然と主張するのはわれわれだけである。

今おこつているすべての混乱、動揺はこの基本的な思想が一つ一つの闘いの全てにあるか無いかによるものだ。われわれは、現実の闘いの中でわれわれの正しさを証明して来た。安保改定阻止を叫ぶものは多い。だが一体われわれを除いてだれが本当に安保を阻止するのに役立つ行動を提起し実行したか？　安保の審議が決定的な段階にあるというのに、組織された労仂者のデモを国会に向けることを拒否したのが労仂運動の指導者であり、一人一人紙切れを箱に入れる「請願」て闘争をすりかえ全力をあげデモをつぶすことに向けたのが「前衛」をなのる共産党であつた。政府与党が警官隊に守られて院内で強行突破を計るとき、その敵の力とぶつかることを恐れるものに、社会主義を語る資格はないのだ。

韓国学生の暴動は何を教えるか。政府を打倒するためには、銃火をおそれぬ突撃が必要なのだ。南アの黒人の闘いは、自分達の解放には自分達の力が必要なことを教えている。三池のストライキは、労動組合の闘いのぎりぎりの局面はピケの強さが物を言うことを示している。これらの闘いを「前近代的」の一言で片ずけるものは、自から近代的な資本家の支配に降服したことを示すもだ。

全国の労仂者諸君！

安保阻止の闘いは最後の時点である。四月二十六日の闘いを、さらに強力に全労仂者のものとして増大し、安保の衆院通過を粉砕せよ！労仂者階級の力で岸内安を打倒せよ！武装警官の力も、裏切者のどうかつも日和見主義者の泣言も、何ものもおそれぬ労仂者の力をもつてふみこえて前進せよ!!

輝かしい仂くの時代、社会主義革命への第一歩がそこに示されるのだ。

共産主義者同盟はその先頭に立つであろう。

一九六〇年五月一日

第三一回メーデー万歳！

共産主義者同盟スローガン

一　日本帝国主義の侵略と抑圧政策　安保批准を粉砕せよ！
二　五・一三労学ゼネスト・国会デモで安保国会通過を阻止せよ！
三　三池の首切を許すな！　生産再開を実力で阻止せよ！
四　ILO批准に伴う弾圧立法を粉砕せよ！
五　労仂運動・学生運動に対する官憲の弾圧には波状デモで応えよ！
六　四・二六国会デモ検挙者を釈放せよ！　デモ禁法制定・警職法再提出を許すな！
七　李承晩打倒に決起した朝鮮人民の闘争に呼応せよ！
八　岸内閣を打倒せよ！
九　革命的労仂者は　共産主義者同盟に結集せよ！

一九六〇・五・一

政府、官公労圧殺たくらむ
ILOへの危険な幻想

安保に次いで今国会の焦点とされていたILO条約第八十七号の批准は、ようやく政府が二十八日国会に関係法の改定を付して上提する運びとなつたが、岸首相自身「継続審議」を口にするなど、成立の見通しは未だ立つていない。昨年のILO総会で日本政府が公然と国際的に非難され、早期批准を公言した関係上政府は追つめられた形であるが、岸政府は国際的面子よりも批准と引換えに官公労関係の組合破壊を狙つた法規改定に重点をおいており、低迷をつづける官公労はこれに対し統一した総反撃を組織しなければならぬ情勢となつている。しかし全逓をはじめILO批准ですべて問題が解決するかのごとき危険な幻想はきわめて強く、権利闘争が批准の院内闘争に依存した形となつており、早急にこれを打破ることが必要とされている。

ILO八十七号は「組合員は自由に組合の代表を選ぶことが出来る」ことを定めたもので、この批准によりまでのように非合法組合として抑圧することは出来なくなる。解雇三役を抱えた国鉄・全逓が特に全逓不当処分撤回闘争の中心にこれをかかげて来たが、昨年来の藤林あつせん案をのんで全逓が事実上三役をおろしたため、当面の権利闘争の焦点とはならなくなつた。そこで政府は批准と同時に追打ちをかけるごとく公労法四条三項等解雇役員を禁ずる規定を削つて職員以外でも組合役員に選ばれることを認めると同時に、在籍専従の禁止と組合費天引の禁止、団交・ストの禁止、罰則強化を打出し、さらに人事院の事実上の廃止を計つた。

在籍専従禁止は、文部省から強力に出され、すでに各県条例の形をとつて日教組つぶしのきめ手とされているが、これが組合の骨抜きを狙つたものであることは明らかである。しかし国公関係の各組合では逆に在籍専従によつて組合人事が当局の人事の一部として行われる（だれを専従に出すかについて部課長の発言権が強大である）のが一般であるため、文部省以外の省ではこの廃止に強く反対しており、結局三年の期限付きで折合つている。

争議、団交の禁止、制限は本来この条約と何の関係もないものであるが、政府は鉄道営業法を改悪し「義務に違反し、又は職務を怠つた」者をすべて処罰（最高三ケ月の徴役又は罰金二千円を三年又は五萬円と大巾に引上げ）出来るようにし（これまでは同じ理由によつて「公衆に危害をかもす場合」のみ処罰の対象となつていた）、国家公務員には「組合役員は争議を行わぬよう制止する義務」を負わせ、組合員は「組合の違法な決議に従う義務のないこと」を法制化するという、全く組合否認の法案を用意している。これらの弾圧法規が通れば、国公、地公、公企の組合活動はことごとく政府の「合法的な」弾圧を受けることになる。

さらに公務員のスト権はく奪の代償として中立機関としておかれた人事院を改組し、給与、任用、厚生等を総理府に新設することによつて、スト権のない公務員を雇い主である政府が直接支配することとなつて、完全に労仂者の権利が失われることになる。この様な、昭和二十三年に公務員からスト権を奪つた時に匹敵する権利はく奪に対し、解体した官公労を再び結集して統一闘争による反撃を組むことが急務であり、これによつて国鉄・全逓と打ちのめされている官公労の闘争を再起させるきつかけも生れるのだ。

だが総評、社・共をはじめ上から下までILO条約に対する幻想はこうした闘いの姿勢を失わせ、全てを条約批准、それも院内のかけ引にあずけている。ILO条約は労仂組合の権利を法的に保償すると同時に、階級闘争に代えて条約・協定によつて労使関係の安定をめざす徹底した改良主義の産物である。ILO（国際労仂機構）は第一次大戦後のベルサイユ条約にもとづいて国際連盟の附属機関としてアメリカの悪名高い労仂者ボス、ゴンパースらの胆入りで作られたものだ。レーニンが国際連盟を「強盗の巣」と呼んだごとく、ILOは第二インターの改良主義の結晶であつた。その後国際連盟が国際連合に代つた後もこれは労仂者・資本家・政府の協議会として続けられ欧米労組を完全な労資協調の道具にするのに大いに役立つて来た。これは国際自由労連の主な舞臺であり、今回の批准も自由労連のテコ入れで全労——民社のヘゲモニーのもとに、総評内部でも札つきの宝樹、原口ラインで進められ、日教組の勤評闘争、全逓の処分撤回闘争の爆発を回避する道具になつていたことでもその本性は明らかである。さらに欧米資本家とその仲間である自由労連にとつてこれは日本のダンピングに対する帝国主義的な予防政策であることも忘れてはならない。自由労連の思想に乗つたILOへの依存は現在の労仂運動の全労化に一層拍車をかけるものである。数年前まで、官公労は政府の攻撃をILOへ提訴することを拒否して実力で政府と闘う姿勢を持つていた。今日左翼の間にすらそれがないことはきわめて危機的であるといえる。改良主義機構に自から落ちこむことなく、労仂者の実力のみが自からの権利を守ることを、今回の批准および法規改悪反対闘争を通じて思い出さねばならぬ。「批准が遅れるから」と弾圧法規改悪を少しでも認めては絶対にならない。

戦後日本のメーデー
—闘いの記録—

メーデーといえば、誰しもがすぐ五二年の〝血のメーデー〟を想い起す。戦前官憲にとりかこまれながらデモを組んだ時のことを別にすれば、日本のメーデー史上、最とも戦闘的なものであつた。

ところが、安保闘争の最大の決戦期に入つているなかで迎えようとしている第卅一回メーデーを前に、メーデー実行委員会は五月一日が日曜日であり、家族づれの参加が目立つことであろうから、ジクザクデモは一切やらない、文字通り、「労仂者の祭典」としての意味をもたせるとの決定をした。もちろん、毎年恒例のように五月一日が訪ずれると、その時の政治情勢や、労仂者の闘争となんの関係もなく、——メーデー決議や大会宣言などの文書で書かれるかどうかが問題なのではない——「労仂者の祭典」として行われるのであれば、資本の鉄鎖から解放されていないプロレタリアートにとつてはなんの意味もないだろう。「メーデーとはそういうものだ」と知つたかぶりをしてお祭りさわぎにうつつをぬかす連中にたいして、忘れ去られている日本プロレタリアートの戦闘的闘いを想起させなければならない。

戦後十五年の歴史のなかで、メーデーが真に大衆的なエネルギーを爆発させたのは二回ある。すなわち、四六年と五二年である。四六年の第十七回復活メーデーは、幣原内閣が総辞職し戦後初期の革命的激動期における最大の政治的危機—一ケ月にわたる政治的空白期のなかでプロレタリアートの階級的昂揚とともに開かれた、四月七日、幣原内閣打倒人民大会に集つた労仂者は廿萬をこえ、デモ隊は首相官邸におし寄せたがこの時、占領軍は始めてデモ隊に発砲、四月危機とプロレタアートの昂揚にたいして崩壊にさらされたブルジョア権力を必死になつ維持しようとしていた。だが四月十二日には生産管理弾圧反対労仂者大会、廿七日には全労仂者大会が組織され、破局的な食糧危機にたいする労仂者階級のエネルギーの爆発とも結びついて政治危機が深刻化するなかで、三百萬の労仂者、東京では六十萬の労仂者が集つてメーデーが開かれ、さらに、五月十九日には、三十萬の食糧メーデーのデモ隊が首相官邸になだれこんだ。しかしこの大衆闘争の爆発も、当時、労仂運動の指導権を握つていた共産党の無能のために、第一次吉田内閣の組閣を許し、危機は一応去つた。

五二年の第二三回メーデーは、前年秋結ばれたサ条約と安保条約が四月二八日に発効し、二・一ストに次ぐといわれる破防法闘争のさなかに開かれた。労闘ストはすでに第一波、第二波が闘われ、これと結合し、「占領体制」から「解放」されたエネルギーを有効に爆発せしめるならば、プロレタリアートの闘争は巨大なうねりとなつて前進し、四九年以来の労仂運動の後退に終止符をうつことが可能であつた。エネルギーはたしかに爆発した。〝人民広場へ〟という形をとつてそして武装警官はデモ隊におそいかかり、血が流された。ブルジョアジーはうろたえ、動揺しはじめた。だが、これを指導した共産党は、破防法を阻止し、吉田内閣を打倒する闘いとして意識的にとりくんだのではなく、ただ、〝人民広場へ〟のスローガンだけが先行していたにすぎなかつた。だからエネルギーの爆発とそれを称揚するいくたの讃辞にもかかわらず、五月、六月の破防法闘争はこのメーデーとは別個に闘われたのだつた。

四六年には、政治危機と結合しながらも、五二年には、エネルギーの大爆発をともないながらも、いづれも代々木官僚の無能と裏切りによつて闘いは終始させられてしまつた。

いま、日本プロレタリアートの運命を左右する安保闘争の最大の決戦期に突入しているときに、第卅一回メーデーが、お祭りさわぎとしてではなく、五月闘争の突破口として首都における五十萬のエネルギーを結集しうるか否かは日和見主義指導部思惑をのりこえて前進するかどうかにかかつているのだ。

廿三日　国会におしかけた全学連

正門前に坐り込む
四・二三全学連二千五百国会へ

四月二十三日午後二時、全学連学生二千五百は、中間報告で紛糾する国会に押しかけ、夜十時まで果敢な抗議の活動を展開した。

この日、全学連のデモ隊国会に来るという情報に、衆参両院議長の要請で、国会内外には、五千名の警官隊が配置され、十一・二七と一・一六羽田デモの時にもまさる厳戒態勢で学生の国会接近を阻止しようとした。数度にわたるもみ合いの後、警官隊の殴り込を防止するために、デモ隊は一せいに坐り込みを行い歌と「安保批准を許すな！」「岸内閣を打倒せよ！」のシュプレツヒコールで、院内の社会党議員の奮闘に声援を送つた。

共産党に指導された約二百名の教育大学生が国会裏門で署名を行つたが、共産党中央の「デモには参加するな」という指令に忠実な執行部は学生をデモに近ずけずに、早々に解散させようとしたが結局半数以上の学生が執行部のしめつけをはねのけて、デモに合流し、全都の学生と共に最後まで闘つた。午後七時、警官隊は、近辺で学生の坐り込みを声援していた市民、報導関係者を多数の腕力で排除し、違憲判決の出た都公安条令を楯に、実力行使と称して、一斉に無抵抗の学生におどりかかり、スクラムを組んでいる学生の腕を拳骨でなぐり、腰を靴で蹴りえりに手をつつこんだりして、ゴボウ抜きを開始した。

学生はにえ返る憤満をこらえ、インターを斉唱しながら、警官隊の暴行に対してスクラムをいよいよ固くして抵抗した。

広い道路の反対側に、引つ張られた学生は、再びそこで坐り込みを開始した。

夜間の学生二百名は、チャペルセンター下で警官隊に阻止され、やはり坐り込みを行つてにらみ合つていたが午後八時頃警視庁方面から約三百の法政夜間の学生がデモつてくるのを歓迎するために総立になつた瞬間、約千名の警官隊がどつと押してきたため、大混乱となり最前線に立つていた明大の学生は顔を警官のくつで蹴られ、顔面血まみれ成蹊大の一学生は両足を二人の警官にとられ仰向けに倒れたところを下腹を蹴られ、立ちあがれなくなつたが、警官隊は救援にかけつけた学生をけちらすなど暴虐の限りをつくした。

午後九時、チャペルセンター脇に坐り込んでいたデモ隊にゴボー抜きの第二次実力行使がかけられたが、学生は有楽町駅まで激しい蛇行デモ行つて解散した。

メーデーに生命を
—その歴史によせて—

（一）

〝時は来るであろう。その時の墓場のなかにおけるわれわれの沈黙は、生けるわれわれの言葉よりさらに力強く人びとの心をうつであろう！〟

メーデーの歴史について語る殆んどの書が、絞首台から叫んだこのスピエスの言葉を引くのを読む時、われわれは異常な感動とともに、メーデーの歴史の第一頁が資本家の貪欲な欲望のために流された戦闘的労仂者の血で眞紅に染めぬかれているのを知るのである。

メーデーの起源として知られる一八八六年のシカゴメーデーは、十時間労仂制の成果の上に八時間労仂制獲得をめざす国際的運動の先端として闘われたのである。生成期の資本主義が主として時には十八時間にもおよぶ無制限の長時間労仂を労仂者に強いて富の蓄積をはかつてきたのだから、「労仂日の制限は、それなしには解放を求める他のあらゆる努力が挫折せざるをえないところの、一つの予備条件」（第一インター、一八八六年の決議）であつた。国際労動運動は、八時間労仂制獲得の運動として始めて力強く展開したのである。一八八四年、アメリカ、カナダ職能別労仂組合連盟は一八八六年五月一日から八時間が法定労仂日として制定さるべきことを決議し、この達成のために力で闘うことを決め、もしこれが時の政府によつてうけ入れられぬならば、この日を期してゼネストに入ることを決議したのである。——こうして八六年五月一日の闘いは二年間の準備の上に闘われたのであつた。

ゼネストは不可避であつた。四月三十日の日曜には二萬五千がデモに加わつた。五月一日、歴史的ゼネストは三十萬余をまきこみ、シカゴを中心にミルウオキー、デトロイト、ニユーヨーク等で行われた。闘いの中心シカゴでは四萬がストに加つた。ゼネストは五月一日に止まらず、日を追つて擴大した。

翌二日、マユーミック農機具工場では、首切られた千二百の労働者をかこんで大集会がもたれ、三日にはスト労仂者に実力弾圧を試みた警察隊と激しく闘つた。銃弾は放たれ、六人の労仂者が殺された。ただちに抗議の集会が持たれ、翌四日同じヘイ・マーケツト広場で労仂者の大集会を行うことが決定された。

集会はスピエス、パーソンなどの激しい演説をおりこんで警察権力に対する怒りと憎しみに満ちたものであつたが、突如として街かどにひそんでいた完全武装の一八〇人の警官隊が襲撃し一発の爆弾が群集の中に投げこまれた。広場は鮮血であふれ、四人の労仂者が殺された。

この日から資本家階級は徹底的弾圧にまわつたのである。パーソン、スピエス、エンゲル、フイツシヤーなどは逮捕され一年の後に絞首臺で殺されたのであつた。見せしめに、と群集の前に絞首臺を設けた首切り人たちが、「何か言うことはないか」と問うた時、スピエスはコウ然と「時は来るであろう」と叫び、パーソンはまた「われわれアメリカ人民のさけびは全世界の人民の心にとどくであろう」と叫んだのである。

二年後の一八八九年、後に第二インターとなつた国際労仂者大会パリ大会は、五月一日を国際プロレタリアートの革命的示威の日とすることを宣言した。そして翌一八九〇年には、アメリカ、ドイツ、フランス、ベルギーなど全世界で警察権力と激しく闘いながら最初の国際的デモンストレーションは敢行されたのであつた。

（二）

こうしてメーデーの歴史は最初から国際プロレタリアートの、ブルジョアジーとその犬との流血の闘争に彩られていることを知るのである。

とすると、われわれは、すべてのメーデーの歴史を語る人人が捧げるスピエス、パーソンへの献辞を、現実の階級闘争とメーデーとの間に、どこに接着点を見出そうとしているのかを奇怪に思うのである。

メーデーは、単なる労仂者の団結を誇示するばかりのものでもなければ、ましてお祭りなどではない。

それは、その時点時点での労仂者階級の中心的階級闘争の目標をかかげながら、世界的に一斉に決起する日であり、闘いの集約点であり結節点なのであつた。

全世界のプロレタリアートはメーデーをまさにそのようなものとして闘つて来た。レーニンは、一九〇五年の革命のさなかにめぐつてきたメーデーに「労仂者農民諸君、武器をとれ！秘密の集会を組織し、民兵隊を編成せよ！…いま全世界の労仂者は、自由の大業に数かぎりない犠牲を捧げた英雄的ロシアプロレタリアートを息をころして見守つている。

われわれはどんな犠牲にもたじろがない。われわれは蜂起を通じて自由へ、自由を通じて社会主義へ前進しよう！と呼びかけたのであ

それぞれの国のプロフタリアート及びブルジョアジーの闘いを、この一日の革命的デモストトを、一層おしすめる所にこそ、メーデーの闘いの国際性と革命性であるのだ。

現在、メーデーは、年々盛大になるとともに、戦闘性を失い、現実の階級闘争からかけ離れた〝祭典〟となり民同幹部によつて春闘を早く打ち切る口実にされてきている。レイレイしく並べられたスローガンはむなしく空に流れ、平和的ムードの中でダ行デモまで棄てさられようとしている。メーデーはかかるものではない。メーデーに階級の生命を回復せよ！メーデーを闘いの結節点とせよ！

労動祭は労仂者の階級意識の表現である。我々の労仂の上に眠る資本家に挑む定期的戦闘である。我々中心要求の声を以つて資本家の眠りを破れ！

五月一日を祝福せよ！

五月一日に大示威行進を敢行せよ！

労仂を祝福し生産者れるを誇れ！

万国の労仂者団結せよ！

（一九二〇年日本才一回メーデー（檄文）

【赤鬼】

赤雷

★南朝鮮人民の戦いは、遂に李承晩一派の追放に成功し、今や、朝野をあげて大浮れである。★民族主義者をモットーとする各国共産党は、ここぞとばかり愛国主義宣伝に拍車をいれ、南朝鮮人民の偉大な革命的蜂起を「反共愛国」の鋳型にはめ込み基地の撤去にあると断じて運動の方向を没階級的な排外主義におしやろうとしている。★しかしこれ程各国ブルジョワジーを喜ばし、南朝鮮の支配階級の不安をやわらげるものはない。支配階級が何よりも恐れているのは、人民が国家や民族の事よりも自分たちの飯の事で騒ぎ出すことである。★かれらは先手をうつて、行きすぎへのブレーキという名目のもとに反革命を開始した。「李承晩の一身の保全と礼遇」を議会で超党派的に決議するのが第一歩だ。許政新政の目的は「爆発的な一般感情を建国のための愛国的な意志に転換」し、西獨のように下からの積極的な反共愛国に支えられた「安定した政府」を作ることである。流血の闘いを病める奴隷主に生気を吹き込むための輸血奉仕にとどめてはならない。闘いを奴隷主への反逆へ導くこと。

続開 中央委で妥結許すな 闘う指導部のもと体制作れ

電通廿三中委

全電通労組では四月二十一日伊豆長岡中学で二十三中央委を開催、今次春闘の妥結をめぐり烈しい討議を行い、会期を一日延長した上、強引に妥結を認めさせようとした中闘案が採決の結果、過半数に達せず（本部案賛成六十八、反対十八、保留四十九、過半数六十九）混迷の内に休会が決められ、二十日間の後に再度続会中央委が開かれることになつた。

この中央委では、さきの二十二中央委で決められた諸要求が、十三日からの年末闘争を前に、何等基本的要求が解決されないまま、ストが中止されたこと。その上合理化四条件をのんだことに対し組合員の不満が爆発し、中闘に対し不信が拡大していつた中でもたれた。しかも今迄中闘の要求通りになつていた中央委がどういう態度をとるか極めて注目されていた。

妥協に不満續出

討議は先ず十三日の年末闘争を前に中闘が妥結を計つた態度について意見が集中した。中闘では⑴組織の実体⑵三池など全体の労仂運動が闘わないようになつてきたこと⑶第二波以降闘つてもこれ以上妥結内容の前進がありえないこと、などの理由をあげ、スト打切り、妥結は「止むを得なかつた」ことを主張し、中闘のとつた態度について承認されれば今後の方針として次の六項目を提案した。①調停案が四月二十六日頃出される予定なので妥結権を中闘に一任してもらいたいこと。但し一定額についてはあくまで頑張り、これがいれられない場合は討議し定期大会までのばす。②津の処分について法廷闘争で闘う ③その他の実害処分も法廷闘争で闘う ④安保の闘いは共闘の中でやる。⑤四月七日の処分、賃金カットについては組合で補填し臨時徴集を行う ⑥春闘で脱落した者は、前向きで処置してゆく。

これに対し積極的に正しいから妥結すべしとする意見はなく多くの支部からは基本的要求が何等解決していないこと、中でも四月七日の処分について来年一月から回復措置がとられることをトップ会談で一札とつたとしても、具体的に七月と十月の昇給にたいし八萬余名が三ケ月の昇給延伸を行われることに対し極めて多くの不満がのべられた。更に生産性向上運動に賛成するのか、しないのか、全労になるのか、総評にとどまるのか、かつて職種別職務給を最初に導入したように、全電通の性格をもかえてしまう、合理化四条件をめぐつて激しい追及が行なわれた。

矛盾の激化した民同支配

会議は全体として中闘にたいする不満につつまれていたが、実際にはモヤモヤした空気で終つてしまつた。これは追及する方で、中闘の裏切りを完全にバクロし徹底的に追及するなかで不信任をもつて闘う気迫に欠けていたためである。そのため何か物足らない感じを全体に与えてしまつた。それにもかかわらず、今まで中央委は中闘の下請機関に過ぎなかつたのが、三度の取り直し採決でも過半数が得られず混迷状態になつた。十五中委で公社から首切られた本社旧三役を組合からも追放する時かなり混乱を呈したが、それとは違つた意味において、闘争の妥結をめぐつて、この様に混乱したのは始めてである。会場の中でも会場の外でも中央委員より「末期的症状だ」という歎きが叫ばれたが、まさにその通りである。だがそれは全電通労組の末期的症状ではなく、民同支配の末期的症状を意味するものである。

たしかに中央委員は民同と呼ばれる人が圧倒的に多いにもかかわらず、殆んど統制がきかないというのが実状である。このような状況がおきる背景には、第二次五ケ年計画の拡大修正を至上命令として強行する公社、資本家にとつては従来のような闘わない全電通すらじやまになつてきたのである。そのあらわれが、今回の妥結条件にみられるように要求は第三者機関でやれ、そのくせ処分は断固としてやる、「公共性を理解して『合理化には協力しろ』、そのためには、闘う原動力を作る職場闘争の圧殺をねらい、全労化を明確に打出してきたのである。彼らのいう「経営者十五年の時代」の内容である。これにたいし現在の中闘民同の多くは、従来よりもつと右傾化した型で自己の支配を計ろうとした。しかし全電通労仂者はそのように甘くはなかつた。一票投票で見られるように巨大なエネルギーがあるし今次春闘の妥結についても極めて多くの不満があり、この下部労仂者の戦闘的気分を反映し、闘うゼスチュアを使わなければならない民同、ある程度闘おうとしている民同等との矛盾が前記したような中央委の状態となつて表れたものである。

決定的推進力が欠けている

このように全電通全体として重大な転機にさしかかつているが、中央委の討議内容を見ればあきらかに重大な点において、組合員の意向から離れ、闘う真の推進力に決定的に欠けている。それは討議の中心が合理化四条件を中心に行なわれた中にも現れている。勿論この四条件が、今後の闘いに決定的な要素となることは前記した通りである。従つてこのこと自体について討議することは正しい。しかし職場の組合員にしてみれば、こんな馬鹿げた四条件は、徹底的に反対で、「絶対に拒否」という一言につきる。それを中央委でのむべきかのまざるべきかで大半の時間を使うこと自体が全くナンセンスである。こんなことでは敵の打ちこんだ枠の中での討議で前進の方向は見出せない。問題はそういう所にあるのではない。大体今次春闘はどういう要求で始められたのであるか。二十二中委で中闘提案を乗りこえて闘う方針を決めた、あの時の状況をもう一度考え直してみる必要がある。そして一定額七千円という独自の要求を決め、独自の闘いを組織していく中で、明らかに闘いの指導権を握り、完全獲得にむかつて進んでいつた時のことを思いおこしてみる必要がある。職場の労働者が考えているのは、要求も取らないのに勝手に妥結したことに対する激しい怒りであり、一定額七千円、等級撤廃、不当処分の完全撤回、時短、合理化反対の諸要求を完全に獲得することである。このような要求を完全に闘い取つて行くことを組織化していけば、当然四条件などは、ふつとぶのである。

しかるに奇妙なことに一定額七千円、等級撤廃、処分をふつとばすような大闘争、などについて殆んど討議もされず、最後に万場一致、調停、仲裁について中闘一任になり、処分も団交で解決しようと、なつたことだ。さらに目前にせまつた安保の決戦、四月二十六日をどう闘うかということについて全然討議がなされないで終つたことは、全く現在の政治情勢を正しくつかんだ上で、闘つて勝ちとつてゆくということではなく、明らかに間違つている。最後に討議の中で若干臨時大会の要求が出されたが、二十日後に中央委の再会が提案された際、明らかに、この間に中央委員の切り崩しを計り、中闘案をのませようという陰謀にもかかわらず誰一人として反対者がなかつたことは、全く闘う戦意を欠いている。このような状態になつた原因として、もつとも強く闘わなければならない中闘委員の共産党員諸君に、重大な責任がある。特に近畿にみられるように、「統一と団結」のためかしらないけれど民同と一緒になつて四条件も含め保留に廻つたことは、前衛を自称しているだけに犯罪的行為である。

このようにみてくるならば中央委員会の中に、妥協なく闘う真の指導部、共産主義者同盟の方針のもとに闘う指導部を作り出すことは何よりも急務である。

完全獲得へ向つて進め

これから二十日の間に各職場で討議が行われ、支部委員会などがもたれるので、直ちに次のような方針で闘い、下部から決議しつきあげなければならない。

一、続会中央委での妥結絶対反対、直ちに全国大会を開け！

二、四月七日の処分を撤回せよ！

三、屈辱的四条件の粉砕！

四、ゴマカシ調停案の拒否！

五、一定額七千円、等級撤廃、一切の不当処分撤回、時短等の完全獲得へ向つて進め！

六、裏切り民同中闘不信認闘う指導部を作れ！

闘う指導部のもとに、直ちに闘う体制を組みなおせ！

八、三池闘争の支援、安保粉砕、岸内閣打倒！

九、今こそ非妥協的に闘う真の前衛、共産主義者同盟に結集せよ！

血の犠牲と簒奪者

南朝鮮暴動は何をもたらしたか

—山田浩二—

四月十九日の京城暴動は、馬山で爆発した人民の怒りを一挙に韓国全土に波及させ、すべての都市の廣場、街道を人民のデモでみたした。無気力と隷従の人民は、一夜にして誇り高い巨人と化し、その比類ない勇気は全世界のブルジョアジーをふるえ上らせた。催涙弾と小銃を乱射する警官隊に向つて、その都度おびただしい死傷者を出しながらも、数度にわたる素手の突撃を試みた人民の大胆さに、大統領官邸に立てこもつた李承晩は、眼のさめるような、衝撃を受けた。韓国の支配階級の間には、深刻な動揺が起り、見苦しい責任のなすり合いが始まつた。またたく間に王者の地位にのしあがつた人民の怒りを鎮めるために、あらゆる遁辞と約束の言葉が濫発され、大統領はじきじきにかつての「暴徒」が収容されている病院を見舞いに足を運び、「暴動で死亡した学生を国民英雄にする手続きをとりたい」と広言している。支配階級の従僕として無差別銃撃を行い、侮蔑と憎悪の罵声の中で、今尚、人民に銃口を向けることを命ぜられている警官隊の間には「一体、今誰がわれわれを保護してくれようとするのだろうか」という不安がみなぎり始めた。十九日以後、人民の眼の前は急に明るくなつた。韓国人民は自分達の希望が少しづつかなえられて行く満足感を日毎感じている。では、十九日の蜂起は人民に勝利をもたらしたのだろうか？否、根本的な事態は全然変つていない。勝負を決める戦いはこれから始まろうとしている段階にすぎない。支配階級は、十九日の壮烈な蜂起にショックを受け、自らの力でかろうじて抑えている人民が、何かのキッカケをとらえて再び暴れ出すのを極度に恐れている。だから、一定の冷却期間を作り、人民の熱がさめ、再び思い通りの搾取と支配を強化することの出来る時期が到来するまでは、若干の譲歩を行い、低姿勢を決めこんだだけにすぎない。そして、人民の血の犠牲によつていよいよ実現されそうになつた李承晩一派の退陣を、丸丸自分達の戦利品として人民の手からすりとろうとしている。何故ならば、不合理と暴力を基礎にした李承晩一派の専横は、韓国の支配階級の間に分裂と不和を作り、人民に対する支配を極めて不安定なものにしていたからである。新党結成による支配階級の結束と憲法の合理的改革による人民収奪機構の安定と強化は、自分達独力では決して手に入れることができない懐中にころがりこんできた獲物である。階級支配の安定は韓国人民の解放を非常に困難にし、社会主義革命を遠い未来に追いやるであろう。かくして、史上何度かくり返されたように、再び、血をあがなつたものがすべてを失い、ふところ手をしていたものがすべてを獲得しようとしているのだ。

韓国人民にとつて、問題は単にだまされるということだけではない。支配階級は、自信を回復し、足元が固くなるや否や、即座に復仇戦に乗り出し、人民の手足をがんじがらめにしばりつけ、自己防衛の階級的本能が命ずるままに、人民が二度と立ち上れまいという安心感が得られるまで、抑圧を強化してくるであろう。何故ならば、李承晩が大統領官廷において発狂するばかりに感じた恐怖と、四月十一日第二次馬山事件において、市警察所が破壊され、武器弾薬が蜂起した人民に奪われ、自分達が所持していた手投弾をデモ隊に投げつけられ、署長が街頭に引きずり出されて半殺しにされ、デモの人海を泳ぐように逃げまわつた馬山警察隊の息のつまるような恐怖を支配階級は生涯忘れることができない程、生生しく脳裏に焼きつけられているからである。支配階級が蜂起の成果を暴し、復仇の牙を磨いている時、韓国人民は何をなすべきか。

それは来るべき戦いにそなえて、今から支配階級の意図を暴露し、簒奪者に対する不信感を煽り立て、強力な革命組織のもとに労仂者階級を結束し、三百萬の"絶食農民"を生み出している貧農を引きつけるための政治的啓蒙、宣伝を展開することである。そのための革命的政党は、早晩韓国内に成長して行くであろう。保守政党の無策無力と経済危機のひつぱくの中で、六十万の寄生的な軍隊の復員も、戦争の危機も、食糧不足も、工業施設の復旧も、どれ一つとして張勉指導下の民主党政府にしろ、あるいは、保守新党政権にしろ、到底解決できない問題である。

蜂起のスローガンは、「李承晩の退陣」「不正選挙のやり直し」から「秘密警察の解体、弾圧立法の廃止、政治犯の釈放、すべての政治活動・言論・集会の自由の無条件保障、汚職高級官吏の追放、失業者の一掃、"絶食農民"の救済」に発展させなければ、蜂起は、「何も得ることなくすべてを失う」結果を招くにすぎなくなるであろう。

この韓国人民の一層の前進を支援するために日本人民は何をなすべきか。それは日本の労仂者階級が、自国の資本家階級と非妥協的な闘いをいどみ、資本家打倒の闘いを強化させることである。このことによつて韓国の労働者階級に刺戟を与え、自己の組織化と階級意識の高揚を促進することである。この共通の敵に対する闘いこそ、国境を越えた連帯行動となるのだ。各国ブルジョアジーは、この韓国人民の闘いの影響を最少限に食いとめ、人民の闘いの国際的交流を遮断するために、韓国人民の蜂起を倭小化し、歪曲するための必死の宣伝工作を行つている。即ち、今回の暴動は、単なる突発的「不祥事」であり、すべて韓国の政治的経済的「特殊事情」に由来するものである。従つて、今回の南朝鮮人民の暴動は民主主義を推進する「国民的」大運動であり、その先頭に立つて「国家と正義」のために献身した南朝鮮の学生は「国民的英雄」であり「愛国の模範」である。だから徒らに社会不安をかもし世論の亀裂を作り出す日本の学連の「デモ騒ぎ」とは似ても似つかぬ異質の学生運動である、と。

そうだからといつて各国ブルジョワジーは、この南朝鮮暴動を特殊民族的暴発であるとたかをくくつているわけでは決してない。

各国ブルジョワジーは、この南朝鮮暴動に示した人民のどこから出たかと思われる革命的エネルギーに色をなし「階級的観点」から暴動の成り行きを注目し、自分たちの将来の安全保障のための階級的弾圧強化に乗り出している。

朝鮮の支配階級がもつとも恐れていることは、李承晩退陣による「八・一五」以来の国民的世論に亀裂が生じ、自信を得た人民が分をこえた要求をかかげ、自分の心臓に迫つて来ることである。李承晩一派の悲劇的終末が明らかになつた二十八日、支配階級は公然と反革命の作業に着手し、「国民に冷静化と「民主的な」政府への協力を要望している。朝鮮人民は流血の犠牲によつてあがなつたものが支配階級が勝手に簒奪するのを指をくわえて眺めるのでなく、来たるべき階級戦に備え労働者階級を中心にみずからの力を糾合し、最後の「本物」の勝利のために全力をあげることである。

国際問題

イタリアの政府危機と伊共産党大会（下）

（一）

五〇年代に資本主義諸国はいづれも技術革新などをテコとしながら、その生産力を急激に上昇させたが、イタリア資本主義もその例外ではなかつた。西ドイツ資本主義の"奇蹟"の前に、イタリア資本主義の発展は往々にして見逃されている。しかし、戦後おそつた革命的危機を伊共産党の愛国主義に助けられて、再建の道に入ることのできた伊資本主義は、五〇年には早くも戦前水準に回復、五九年の工業生産高は前年比十・九%増、国際収支は七億六千四百萬ドルの黒字をだし、さらに昨十二月末の金ドル準備高は二九億五千三百萬ドルに達し英国を追い越し、西独につぐに至つている。

もと〳〵イタリア資本主義は北部の工業地帯にその基盤を求めていたが、この過程のなかで、必然的に従来から存在していた南部農業地帯との矛盾を表面化させ、イタリア政府をして、三ケ年計画で十二億三千萬ドルの財政支出を行い、南部工業化を図る政策を打ださしめた。それはイタリア資本主義の矛盾を、国家独占資本主義の道に沿つて解決していこうとする今日における一般的現象なのであつた。

そして自由化にともなう西ヨーロッパ資本主義の市場競争の激化にそなえ、イタリア資本主義の基盤をより強固にし、より安定させるためには、それに見合つた政治体制を構築することこそ、イタリアブルジョアジーにとつての至上命令であつた。西ドイツのごとく。そしてフランスのごとく。ここに二ケ月以上にわたつて政府危機が深刻な様相を辿つている背景があるといえる。

（二）

トリアッテイは、たしかにイタリア資本主義の諸矛盾について分析のメスを加えてはいる。だがそれを五〇年代から六〇年代にかけての世界資本主義の現状からもたらされる必然的な結果としてえがき、世界革命の展望を今こそ明確にして、イタリア資本主義に対決するのではなしに、またしても、イタリア資本主義の「経済的後進性」にその根原を求めている。だからこそ「われわれは、ヨーロッパ共同市場への参加にあたつて、いわゆる資本主義市場の拡張を批判しなかつた」と民族主義をふりまき、資本主義にたいする驚くべき弁護論を展開せざるをえないのだ。

しかも、第八回党大会以来、うたいつづけられてきた「構造的改良論」の金科玉条である「独占体の制限」「民主主義革命」「新らしい型の民主主義」などが、独占資本主義の支配が貫徹し、ブルジョアジーの攻撃が激化しようとしている時期にあいも変らず語られている。トリアッテイの言う「民主主義革命」とは、せいぜい「抵抗運動」を意味しているにすぎず、そしてキリスト教民主党員、社民党員、カソリック教徒その他が、イタリアの民主主義的伝統を理解せず、団結していないことに悲哀の言葉をなげかけている。そして、イタリア共産党大会こそ「非難の大会となることではなくて、具体的、建設的な提案をおこなう大会となることである」と。つまり、革命の党となるのではなしに、改良の党に徹底せよと。

そのために、すなわち「後進性を克服し経済の諸矛盾を克服するために」「民主主義的経済発展」なる美名を使つて具体的プログラムを提出する「われ〳〵が不可欠と考えるのは、経済体制への国家のより大きな干渉、とくにもつとも強力でもつとも有害な独占コンツエルンの国有化であり、……したがつて公的経済部門の拡張であり……経済発展計画による信用と投資との有効な指導である」と。そしてこうした創意全体が展開されるならば、異なつた政治勢力と——ブルジョアジーのこと——をも結集でき、「独占体の権力にたちむかい、この権力を撃滅し、粉砕することに成功する」だろうと。

「社会主義へのイタリアの道」「構造的改良論」として脚光を浴びたイタリア共産党三十年間の路線の帰結はそれがスターリン主義にたいする真剣な批判の上にたち、放棄された世界革命論を現実の階級闘争の舞台の上に復活させるものでない以上、改良主義への必然的な転落を物語る以外のなにものでもなかつたのである。トリアッテイのいうことは、言葉を裏返せば先にふれたイタリア政府の経済計画を支持し、国家独占資本主義の強化と発展に側面から援護射撃とするものである。

かくして、イタリア共産党は危機の救済者としてふるまおうとした。したがつて「反独占」「新らしい民主的多数派の結集」というスローガンにもかかわらず、そしてまた「セニ内閣をできるだけ早く打倒する必要がある」という大会政治決議にもかかわらず、近ずきつつある政府危機にたいして共産党が全くの無為無策に陥入たのはむしろ当然のことであつたのだ。

（三）

イタリア共産党の路線のこの全き破産とそこからでてくる政府危機にたいする見事な裏切は、フランス、プロレタリアートの敗北の教訓を学ぼうともせず、「民主主義的伝統」を欧歌していたことからくる必然的な結果でもあるが、それはまた、この党が、スターリン主義、フルシチョフ路線の一分派であることを如実に証明したものに他ならなかつた。藤原弘達は、ローマで開かれた欧州十七ケ国共産党宣言を評して「西欧における国際緊張の緩和が共産党の運動にとつては甚だしく不利になりつつあるとみる情勢分析であつた」といつてフルシチョフ平和共存路線の全面的開化のもとにおける西欧「共産主義者」の苦悩を画いている。（中公四月号）勿論下部党員大衆に不満が増大していることはありえないことではない。しかし現実に共産党指導部を支配しているのは、十七ケ国共産党宣言をみてもわかる通り、「緊張緩和」にたいする全き楽観と小ブル平和主義の屁落であり、それは第九回大会にも貫かれている。したがつて資本の論理を無視することから党内に動揺を引き起し党勢力の減少を見ることはあつても、既成の共産党にとつて代るものが登場しない限りイタリアプロレタリアートにたいして与えられるものは、敗北と屈服の連続であるだろう。

客観的には深刻な様相をとつて進行しつつある政府危機、しかもそれを推し進める主体の欠如、ここにこそ西欧プロレタリアートにとつての最大の悲劇がある。外電はタンブローニに次いで組閣にあたつたフアンフアーニも組閣を断念し、結局は総辞職になるだろうと報じているが、大衆闘争一つ組織しえない状況のもとでの総選挙の結果はみえすいている。（〇）

プロレタリアと文化

山田宗睦氏の「新左翼知識人論」

南　成四

社会主義国の存在は一のパラドックスである。共産主義とは達成さるべき状態ではなくて常に現在を否定する運動そのものをさす概念であり、プロレタリア革命とは人類前史にピリオドを印すべき否定性そのものであるが故に全き肯定性を荷つた決定的行動であるはずだ。マルクスの社会主義像も資本論の対角線上にえられた反対概念であつてゴータ綱領批判において展開した諸方策——官吏の給料、労仂証書等々——は明らかに経済学の問題などではなく社会主義社会が存立しうるために最低限実現さるべき実践的な綱領以上のものではなかつた。社会主義経済の原理論などというばかばかしいものは存在しない。

さて、ソヴエト革命の成功とドイツ革命の失敗は世界の革命運動そのものにパラドキシカルな性格を与えることになつた。ロシアプロレタリアートの勝利はドイツプロレタリアートの敗北によつて一国にとじこめられ、革命は新たな局面を迎える。ロシアにおける社会主義建設は世界革命の拠点としての意味を与えられ強固に存在することを要請される。そして、革命は現存を否定する運動という本質にもかかわらず、世界革命のへの進展のために、革命そのものの進展のために逆に革命を制度化し固定化することが必至とされるに至る。

このような現実の状況の中で自己のパーソナリテイを最大限に生かし巨大な官僚支配を確立したスターリンは、かくて、世界革命のシンボルとしてのソ連、そのプロレタリア「独裁」の表現、プロレタリ独裁そのものとなり、世界革命はスターリンという一点に見事に凝集されていつた。革命の推転のために革命の固定化が要請されるが如き、全的人間の獲得たるべき革命がスターリン個人に自己を見出すが如き、革命のこの恐るべきパラドックスは、はたして、マルクス主義理論を枯死させる根元的な力となつたのである

トロツキーはその永久革命論の中でこれを予感していたといえるが、トロツキーの組織論における客観主義によつてスターリニズムからの突破口は別の道をたどつて行われた。

「源泉への回帰」をかかげたルフエーヴルは、その突破口を切り開く最初の偉大な攻撃を試みる栄誉をになつた。それはスターリニズムから労仂者を解放する巨大な衝撃を与えるものであつたが、しかし、「源泉への回帰」という発想法自体がネガテイヴなものでしかない。

マルクスがプロレタリアートなる概念に到達した時、そこには例外なしに貧窮の淵においつめられた労仂者の姿があつた。それ故にこそマルクスはプロレタリアートという包括的な概念をつかみ得たのだ。彼がプロレタリアートは哲学を実現せずして自己を解放できず、哲学はプロレタリアートを解放せずして自己を実現できない、という時、そこには労仂者はすべて例外なく窮迫にあえいでおり、労仂者は全体として人間の否定性を直接に表現しているという、人間の否定性そのものとしてのプロレタリアートという把握がある。マルクスは自己の哲学の否定性の契機をプロレタリアートにおいて見出したのである。

現代社会は、マルクスの疎外論そのものによつては解明しえないであろう。マルクスが哲学から経済学に移つていつた過程をわれわれは現在の状況の中で再構成しなければならぬ。相次ぐプロレタリア革命の挫折の過程で延命の策を見出しつつその社会構造をますます複雑化し自己を拡大していつた資本主義は一見マルクスのプロレタリアートはもはや存在しないかの如き観を程するに至る。怒濤の勢いで進行する合理化による中間層の排出、農村の分解をおさえての慢性的失業人口のプール等々、この状況の中でどこに直接的な否定性を見出さねばならないか。革命への衝動力は人間の否定性そのものであるという意識のみであるのだ。

構造的改良論はこの中から生れてきた。一応スターリン主義批判の装いをもつて立ち現われたこの理論は、しかし、その精緻な理論構造にも拘わらずいま述べたような問題を何等解決していない。トリアッテイは「マルクス主義の資本主義社会批判は、その構造への批判であり、その内的、客観的、階級的諸矛盾への批判である。構造はかわつていない。諸矛盾はより深刻となつている。賃金と消費とのいくつかの改善を見ることが出来たにしても、労仂能率・生産、利潤の水準とのあいだに巨大な懸隔がつくり出され、この懸隔はますます大きくなる傾向をみせている。したがつてわれわれは、労仂者階級の貧困化、いくつかの場合には絶対的貧困化に直面しているのである。」（イタリア共産党九回大会報告）

このような理解に立つならば、複雑の度を加える社会諸階層（労仂者階級内部においてすら）のからみ合いを前にしてはもはや革命の決定的な力をどこに見出すかの規準は把握できない。マルクスは抽象的にしか把握できない。マルクスにあつた直接性の意識はここではまつたく失われ、革命は社会主義という一つの達成さるべき状態に達するためのかけ橋でしかなくなる。しかもこれは逆に革命推進の力を現実には見出しえないことと裏腹の関係にあるのだ。

× ×

自称マルクス主義哲学者、山田宗睦氏が、捲土重来のいきものすごくふたたび「左翼知性の航路」なる一文をひつさげて中央公論誌上に登場したことはまことに注目すべきことだと思われたのだが……。というのは、アントニオグラムシを冒頭におしたてて知識人ポジ像を確定し、小田切の「思想の平和共存」の重大な意義の再評価を示唆するという、気の小さい共産党員をして憤死せしめるにたる著ではあつたからだ。

私もまた、彼が出発点にすえていると思われる「政党論議も、その物質的基礎である独占の合理化状況下の労仂者階級の階級機能をどうとらえるか、そこから合理化反対闘争をどう組織するかの検討にまで進んで、はじめて完結する」（昨年の総評大会への批判）という立場にまつたく賛成である。ここから出発して知識人のポジ像を確定し「このポジ像に即して、日本の解放的末来図へ知識人の航路をひこう」という発想にも賛成である。だが……。

だが、彼は「社会の中間階層とその表現である諸政党とにたいする労仂者階級の立場が変化し……逆転……労仂者階級の国民的役割という歴史的事実が確立した」というトリアッテイの規定を何の抵抗もなく無条件の前提にして現代の知識人論を展開しているわけである。で、彼のいう「新しい政治的知識人のになう、新しい型の知性」の機能と、いまや「かつて共産党結成の原型であつた革命的知識人プラス意識的労仂者が、全階級・層的規模で拡大再生産される」という認識の間には飛躍あるのみだ。彼はその前にトリアッテイの規定そのものを検討する必要がある。

共産党の知性サイクルのとり方、等々に対する批判なり評価なりはそれとしても、山田宗睦の新左翼知性評価論は構造的改良の根底的批判によつてはじめて完成するであろう。われわれの現情分析のポジ像は別の機会に展開する。時いたれば「論文」を書くつもりである。

ホッパー死守が鍵

「長期柔軟」を粉砕せよ！

三井三池

「勝利への展望をきり開いた炭労大会」という総評や共産党の「勇ましい」かけ声にもかかわず、炭労大会以後の三池闘争の現状は必ずしも勝利の方向にむかつて確実な巨歩を進めているとはいえない。

炭労大会は「藤林あつせん案拒否」を闘う方針によつて裏づけるのではなく、長期柔軟闘争にすりかえてその日和見主義にヴエールをかぶせたが、そのことは、大会終了後約十日間の経過が事実をもつて証明している。

大会後、中闘の三鉱連に対する妥結権の恥しらずな承認の結果二十三日に調印された会社側と三鉱連五山との第二次再建協定は組合側の全面降服であり、約三千円（採炭夫などの場合、多いもので六、七千円）の賃下げを認め、会社側に合理化を急テンポにおし進めさせる足場を固めさせた。そして三井資本は三池闘争のおしつぶしに全力をかたむけ、さらに第三次の合理化計画を推進する腹を露骨にしめしている。すなわち三池にも三鉱連と同じ条件で再建案を認めさせるならば、会社側の節減は半期約二十八億円にも達し、その上にたつて、さらに一九六三年までの三ケ年間に一萬人の労仂者の首を切ることを、三井資本は意図している。更にその上、会社側はこの動きに呼応して、十九日、廿日、廿一日と第二組合入構させ、生産再開のための必死の攻撃をかけてき、二十一日までに入構した第二組合員は、約二千百五十人に達した。藤林あつせん案を炭労が拒否したとはいえ、生産再開を強行突破することによつて、彼らは彼らなりの転機をつかもうとしていることは全く明瞭である。そのことは、二十四日、警官隊を動員してホッパーの試運転を強行しようとしたこと、また福岡地裁にたいして三池鉱業所がホッパーのピケ排除の仮処分を速やかに下すことを要求してきていることのなかにもあらわれている。

したがつて、占拠をしているホッパー、ベルトコンベアーを死守し、生産再開を実力で阻止することの意義はますます増大している

だが、長期柔軟闘争を決めた炭労の構えはどうか。三井三池現地指導のため二十五日福岡についた原委員長は「五月大会でカンパと炭労全体のスト体制を協議する。ピケや生産再開はいわば心理的な戦術にすぎない。」と語り、柔軟な闘争とは五月まで炭労全体の体制を組まないことだと明白に手の内を暴露している。しかし二十五日に開かれた三池闘争の戦術決定機関である現地指導委員会は、柔軟な戦術を打ち出すとみられていたが、三池労仂者からの突き上げにあい、三川鉱ホッパーは更に強力なピケで確保するとの線をうちださざるをえなかつた。

いまや青行隊、オルグを三池に集中し、指導部の動揺と裏切りによつていかなる決定が下されようとも、ホッパーを完全に死守し、生産再開を無に帰せしめること、そして予想される官憲との衝突にたいする完全な自衛体制をととのえること、五月大会をまつことなく全国ストに拡大し、安保闘争と結合した大闘争を展開すること、これが勝利の保障である。

お知らせ

四・二六の烈しい闘争と、これにより新らたな段階に入つた安保決戦の方針は、一日発行の号外に掲載する

・編集部